青の乙女と白髭

Dns

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青の乙女と白髭

【Ｎコード】

Ｎ８１２４Ｙ

【作者名】

Ｄｎｓ

【あらすじ】

最終決戦の後消滅するはずだったアルフィミィはなんの因果かワンピースの世界へ。ｏｇ２からの分岐です。

1．終わりと始まりですの（前書き）

書いてしまいました。もういっこの方が滞っているのに。設定に関してはちょっと無茶なことも入ります。あとかなりキャラ崩壊がひどくなる予定です。広い心で見てください。

1．終わりと始まりですの

徐々に期待が燃えていくのを感じる。同時に崩壊も進む。どちらが先に私を殺すのか、できれば燃え尽きたほうが楽でいい。ほんの少しだけ共に戦った仲間たちに別れを告げたアルフィミィはそんなことを思っていた。ほかのアインストよりはよく持っているが死ぬのは時間の問題だろう。後悔はない、敵対した時からこの運命は覚悟していた。むしろ勝利に貢献できたし、仲間と認めてもらえた。あんなにひどいことをしたのに。それがうれしい、同時に悲しくもある。なぜなら、以前は知りえなかったことを理解してしまったから。だから、

「家族、ほしかったですの」

そう、あの仲間たちの中に家族のために戦う人がいた。家族、システムとしての群体ではなく、絆に元ずく集合。それは、とても眩しくて、うらやましかった。特に私は極めて人間に近い。だからアインストの中でも特に孤独だった。もっともほかのアインストには個がないが。仲間よりも深い、そんな絆。ないものねだりなのはわかってる。人ではない私に家族はいない。同族は全て滅んだ。本当にたったの一人、ふと仲間たちが私の死を悼んでいるのを感じる。うれしい、けれどやっぱりどこかさみしい。言い方は悪いが結局は近しい他人。そう思うと、みんながうらやましい。だってみんなには家族がいる。私にはいない。だから、だから少しだけ願った。家族がほしいと。奇跡の勝利を得たのだから、この位かなってはくれないのだろうか。そんなことを思った。そこで私の意識は消えた。

何故か消える瞬間、ペルゼインが笑った気がした。

ふと気が付くと、どこかに寝転がっているようだ。死後の世界、そんなことが頭によぎる。一応知識ではもっていた、人間の妄想だが。だけど、ここはひどく寝ごごちが悪い。いや、むしろ痛い？そう思った瞬間目を開ける。広がったのは一面の青い海と空。どうやら私は岩場で寝ていたらしい。道理で寝心地が悪いわけだ。

「というか、ここどこですの？」

疑問を口に出すが当然誰も答えない。あの時、間違いなく私は滅んだはず。ただ死ぬのではなく、チリひとつ残さず消える。それが私の終わりだったはず。なのに今生きている。呼吸が、鼓動が、私は生きていると証明する。ふと気づくと手には鬼蓮華が‐ご丁寧にも人間向きのサイズで‐握られていた。

「ますます意味不明ですの」

さすがに鬼菩薩はないが、身を守るには十分である。どころか、

「念動力に、これは超感覚？なんでこんなもの使えるんですの？」

持っていなかったはずの力、特に念動力は自分を浮かせ、さらには

短距離テレポートまでできる。ためしたらあっさりできた。当然のようにマブイダチも放てる。実際放ったら轟音と共に海が割れた。ぶっちゃけ無茶苦茶である。リオンぐらいなら一人で倒せそうである。

「この力は、もしかしてペルゼイン？」

かつての自らの愛機、否、半身に思いを馳せる。理屈の通った説明は出来ない。でもこの命は彼に与えられた、そんな気がするのだ。

「だったら、きちんと生を全うしませんとね」

でもさすがにオーバーキルな気もする。改めてこの世界のことを考えるとそう思うのだ。だって機動兵器どころか、飛行機ですらさっきから見あたらないのだ。超感覚もそう言っている。ならばこの世界は人間サイズが基本である。

「まぁ、あって困るものでもありませんし」

ここまで思考をまとめて気づく。すぐそばに人がいると。そこで驚いてしまう。まだきちんと調べたわけではないが半径1キロぐらいにいる人間に気付かなかったのだ。かなりの達人、しかも明らかに警戒している。でなければ気配を消しはしないだろう。とにかく声をかけてみる。

「誰、ですの？」

ずんっと音がしそうな巨体が現れた。前言撤回、鬼菩薩が欲しい。自分が言うのもなんだが、人間なのだろうか。目の前の男は巨人というにふさわしい、否むしろ魔人だろうか。そういえば女の子の姿をしたロボットがいたなぁ、と軽く現実逃避。頭にはバンダナがまかれている。顔つきからして三十代前後だろう。・・・多分。上に来ているチョッキが明らかにサイズがあっていない。つーか今すぐはちきれそうだ。

「オメェさん、何もんだ？」

考えていたら質問が帰ってくる。

「質問に質問は失礼ではありませんの？」

「あぁ、そうだな」

男は頭を掻く。意外と話は通じる？
「俺ぁ、エドワード・ニューゲート。海賊だ。つっても独立したてで一人だが」
えーと、かいぞく？世間自らずな私でも、それがいかに時代錯誤な言葉かはわかる。というか、この人私は犯罪者ですって言っている。いきなり不安だ。
「私は、アルフィミィと申しますの」
内心を悟られぬように務めて冷静に答える。
「アルフィミィか、良い名だな」
基準がわからない。社交辞令なんだろうか。そっちの名前は何というか。前半はともかく後半はとんでもない。ニューゲートて、人名に使っていいいのだろうか。
「そちらはなんとお呼びすればよろしいでしょうか？」
「エドワードでもエドでも好きに呼べばいい、それでだ」
なんだろうか。
「とりあえずここじゃなんだから、少し奥にいかねえか、快適な場所とは言えねぇがここよりはましなはずだ」
これは、まさか、しかし
「ん？どした？」
「奥で何をしますの？」
「いや少し話を聞こうかと」
「にかこつけて私にアレやコレやするつもりですのね」
「はぁ？」
「しかも、私みたいな体型の幼女を、そうか、これがロリコンなのですね」
「ちげぇ！！つーか普通は売られるかの心配するだろうが」
「な、なんてど外道なんですの」
「しねぇよ、ってか話が飛躍しすぎだ。オメェにゃそんなこと感じねぇよ」
「つまり・・・」

「なんだ」
「童貞、童貞ですのね」
「なぜそうなる！！」
「好みの女性を前にして行動にでられない、噂に聞く童貞の行動ですの」
「そもそも何でロリコンがそのままなんだ、俺はもっと大人の女が好みだ」
「変態は皆そういうそうですの」
「ひどくなってる！？」
「変態で童貞、救いようがないですの」
「どっちもねぇよ！！童貞なんて１５の時に捨てたわ！！」
「つまり経験済みの変態」
「変態じゃねぇ！！人の話を聞けぇ！！」
「嫌ですの」
「即答！？ってか途中からわざとだろ」
「違いますの」
「何？」
「最初からに決まってますの」
「ふざけんな！！！！」
「ふざけてます！！！」
「な」
たしか、エクセレンはこんな感じで話していたと思う。やってみてわかるのだが、楽しい。
「くそ、なんなんだオメェは」
「アルフィミィですの」

後に世界最強の親娘と言われることになる二人。そんな二人の出会

いはちっとも運命的ではなかった。

はじめての〇〇ですの（前書き）

ほぼ一ヶ月ぶりの更新です、年末は暇なのでもう少し多く更新する予定です。

はじめての〇〇ですの

「えーと、東西南北の海と大陸あとは島ばっかりと」
「そうだ」
「…ふざけてますの？」
とりあえず異世界っぽいのでエドにいろいろ聞いてみたのだが、地理からぶっ飛んでいた。平行世界というものがあるのだから今までの常識（知識しか無いけど）が通じないのは覚悟していた。けどちょっと無茶苦茶じゃなかろうか。どんなことがおこればそうなるのかさっぱりである。しかも極めつけが、
「偉大なる航路、ですか」
世界を一周する航路、その両脇には無風の海域にして超巨大生物の巣窟、凪の帯。偉大なる航路も全く一貫性のない天気、方位磁針が通じない危険航路。どっちかって言うと魔の航路とかそんな名前が似合いそうな感じがする。で、今いるのが。
「まさに偉大なる航路ってわけだ」
「ドヤ顔やめてください」
自慢げに言うな。えーと一生懸命生きようって思っていましたけど、いきなりなんですかこれは。キョウスケでもこんな賭けはしませんよ。
「ドヤ顔ってなんだよ」
「さっきみたいな顔ですの」
エドは人の気も知らないでのんきだ。
「でだ、こっちも聞きたいことがある」
きた、私が何者か、それを聞こうとしているのだろう。さっきも訪ねてきていたし。
「おめえさん、親はいるかい？」
「はぁ？」
えーと、っちょっと素になってしまった。今このおっさんはなん

て言った？
「今なんて」
「だから親御さん入るのかって聞いたんだ」
「いや普通そこじゃなくて私が何者か聞くもんじゃありませんの！？」
　自分で言うのもなんだが、怪しさ満点な私に何も聞かないのはちょっと無用心すぎないか？
「ん？ああ今まで聞いてきたことからオメエさんはどっか遠いとこか来たってのはわかったからな。それだけ聞けりゃ十分よ」
「なぜ、ですの？」
「オメエさんは、よくわかってねぇんだろ？」
図星、まさにそうだ。説明できる訳がない。なにせ自分のことがよくわからないのだ。ペルゼインがくれた命だということ以外何一つ。知識と体は一人前だが心が伴っていない。しかも知識は世界が違うせいでほとんど役に立たない。こんな状態で何を説明するつもりだったのだろうか。
「それにだ、女の秘密をのぞく趣味はねぇしな」
にやっと笑ったその顔はちょっとかっこよかった。
「変態のくせに」
精一杯の罵倒、あぁこれが照れ隠しなのか。
「まだ言うか。ま、それはともかくさっきの質問に戻ろうじゃねぇか」
「親、ですか」
これまた難しい。だって私は親を殺したのだ。いやまぁあれをお父さんもしくはお母さんと呼ぶのは難しいが。ここはまぁはぐらかしておくか。
「いませんの、ちなみに家族も」
　家族と口にだし、ふと思うやっぱりさみしいと。
「そうか、やっぱりな」
「やっぱり？」

「さっき見たときどうも寂しそうな目ぇしてたからな、それも離れたんじゃなくていないって再確認したときみてぇな」
どんな目だ。すごい観察力だよこの人。でも事実だ。私には待ってくれる人がいない。せいぜい向こうで葬式でもしてくれるくらいだろうか？それも怪しいけど。
「それでだ、提案っていうか、勧誘っていうか」
「なんですの」
さっきまで、の態度とは一変なんか恥ずかしそうに言っている。ぶっちゃけキモイ。
「うん、キモイですの」
「ひどくね！？」
「いや、その体のサイズで恥ずかしそうにくねくねされると背中がゾクッとしますの」
「それでも口に出していうか？」
「いいましたの」
はぁーとため息をつかれた。でも、言っとかないといけないそんな気がしますの。
「まぁなんだ、話を戻すとだな、…俺の娘にならねぇか？」
「…やっぱり」
「ん？どういうことだ？」
「やはりあなたは・・・ド変態でしたのね」
「だからなぜそうなる！？」
「血の繋がらない親娘同士で、アレやコレをする。もはや救いようがありませんの」
「そんなつもりは一ミリもねぇよ」
「じゃあ私は魅力がないと」
「別にそういうわけではって泣いてる！？」
「ひどいですの、女性に向かってそんなことが言えるなんて」
「一言も言ってねぇ、つーかむしろ可愛いだろオメエは」
「…本音が出ましたのね、やはり変態ロリペド野郎ですの」

「嘘泣きかテメエ！！つうか俺の好みはオメエみたいなチンチクリンじゃねえ！！」
「チチクリ…」
「言わせねぇよ！！」
「…ッチ」
「わざとだったんだな」
「まぁ冗談はさておき」
「いきなり戻んなよ」
「このままだと話は平行線ですのよ」
「誰のせいだ！！」
「私のせいですの！！」
「無い胸張って言うな！！」
「んなっ！！気にしていることを！！」
「たまにはやり返してやるさ」
「エドのくせになまいきですの」
「はっ、悔しかったら胸を大きくしてみやがれ！！」
「もういいですの、ちょっと本気で泣きそうですの」
「あ、スマン」
なんて、何て締まらない会話なんだろう。なのに、なんでこんなに楽しいのだろう。これが、私の求めていたものかな？
「…」
「…」
「始めに言っておきたいですの、この話を聞いてそのまま立ち去っても構いませんの」
「いきなりなんだ？」
「もしもそうなるのだとしたら嘘は付きたくないですの」
そこから私は話し出した。私がなにもので何をしてきたのか。もちろん、あの親殺しも。
「ひとつ聞きてぇ」
話終えて返ってきたのはそんな一言だった。

「なんですの」
「オメエさんは、その親を愛していたか？」
「それは間違いなく否ですの」
それは間違いない。そもそも愛された覚えもない。
「…そうか、だったら俺は愛される親父を目指してやる」
「いいですの？」
「当然だ、オレぁなはぐれもんで家族を作ろうって思ってんだ。愛してもらえなきゃ家族どころかあっという間に敵だ」
「もしも、家族から敵になったら？」
我ながら意地の悪い質問だ。
「そんときは素直に刺されるさ、わるいのはオレだからな」
器が大きい、そう思えた。この人は見栄だとか誇張じゃない本当にその覚悟をもっている。
「オレァなオヤジになるってことはそうなんだと思っている」
と豪快に笑っていった。クスっと笑ってしまった。
「さっきのキモイオッサンと同一人物とは思えませんの」
軽口と共に、
「あーあれは忘れてくれ、二度としねぇ。…それでだ、返事はどうなんだ？」
「催促だなんて野暮ですのね」
「うるせえ、気になるんだよ」
「もちろん、娘にさせて欲しいですの」
「本当か？」
「マジですのよ」
エドはその一言で嬉しそうに手を握り締めた。
「これで一人目だ、こっから始まるんだな」
「そういえば父上」
「なんだ、ってなんて呼びゃいいんだ？」
「アルフィミィでいいですのよ。間違ってもアルって呼ぶのは許しませんけど」

「了解だ、でなんだ？」
「いえ私たちは海賊になるんですよね？」
「まぁそうだな」
「その一味の名前は？」
「まだ二人だけで一味ってのもなんだけどな。白ひげ海賊団って名乗るつもりだ」
「…えーともしかしてそ無精髭は」
確かに白いけど、
「あぁこいつはまだ未完成だ、最終的にはだな」
そういい取り出したのは不敵な笑いに三日月のようなヒゲをつけた、ドクロマークだった。
「こうなる予定だ」
「これって人間のヒゲですの？」
「当たり前だ」

のちの最強の親娘はこうして家族の契を結んだ。出会いは運命的ではなかったが今この瞬間は運命を感じる二人だった。

はじめての〇〇ですの（後書き）

感想、意見まってます

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8124y/

青の乙女と白髭

2011年12月26日23時56分発行